心理的時間に関する実験的研究 (11)

―― Y-G性格型による「時間」イメージの比較 ――

甲　村　和　三
人文社会教室
（1989年9月2日受理）

An Experimental Study on Psychological Time (11)

―― "Time" Images Compared among Five Groups Classified according to the Yatabe-Guiford Personality Inventory ――

Kazumi KOHMURA
Department of Humanities
(*Received September 2, 1989*)

The purpose of this study was to investigate the image profiles of "time" by comparison with those in each group of five personality types classified according to the Y-G Personality Inventory. Time image was measured by rating the 42 opposite adjective scales in the Semantic Differential Method.

Main results were as follows: The image-profiles based on the mean rating scores of each adjective scale were similar among the five groups. However, the profile in the D-type group showed the rather different tendency by comparison with those in the other personality types. It showed remarkably to be comfortable, fruitful, abundant, dynamic trends in *the factor of mood*, and expanded, eternal trends in *the factor of time perspective*, and familiar, far trends in *the factor of activity*, and youthful, fresh, positive trends in *the factor of time structure*. By comparison of rating scores with each another among five groups, the statistically significant differences were observed in many adjective scales included in *the factors of mood and activity* which seemed to reflect the emotional aspects of time.

These findings seem to suggest that time-concept for us includes meanings as time indicated by the clock and emotional experience of time.

I. はじめに

「時間」の心理学的研究は時間評価に関する研究が比較的多いが，それに比べて時間概念の獲得や時間概念の心理的意味などに関する研究は少ない。特に，時間の心理的意味を問うたり，その形成に関するような研究は青少年の時間的展望に関する研究の中で散見する程度である。しかし，時間の意味論的研究は[20,21]，「時間とは何か」といった時間の本質を問題にする上で極めて重要と思われる。ただ，時間そのものを具体的手段を用いて即物的には明示出来ない状況が実証的研究を目指す心理学的研究の障害となっているといえる。従って，時間の本質を問う課題は，例えば人々にとって時間とはどのようなものと思われているのか，また，そうした時間についての考えがどのように形成されたかを吟味する間接的課題に代えざるをえないであろう。

事物の存在規定としての存在時間に対して，意識の流れに本質を求めた意識時間（伊東，1980[5]）に関しては，哲学・医学・生物学・歴史学などの諸分野にその研究事例を見ることができる。例えば，哲学ではAugasutinus以来，意識の流れとしての時間は大問題であってきたし，医学，特に精神医学では時間意識の異常についての事例報告が多くみられる[3]。さらに，歴史学あるいは民族学では，例えば農耕や牧畜などの生活ペースに結びついた時間のイメージともいうべき素朴な民族的時間観，例えば直線的時間の流れ（ヘブライ＝キリスト教的な時間構造では創造と救済に至るまでの直線的時間）や円環構造（ギリシャ・インド・中国などの文化圏が含まれるといわれ，いつか同じ時間が巡ってくるという考え），さらに，輪廻というべき螺施状時間イメージ（ほとんどの文化圏で想定されているという），個人の死とともに途絶える時間イメージなどが知られている[17,18]。

一方，心理学では医学などの領域での患者の特異な時間経験（たとえば「時間」が断続的に進むなどの報告[8,9]）についての記述的報告を見ることができる程度であって，時間観ともいうべき一般的な時間の感じ方などについてはほとんど追究されてはいないのが現状のようであ

る。

このような経緯から筆者は人々の複雑多義な時間経験の意味，特にその情緒的側面についての因子的構造を明らかにすることを主眼とした研究を展開している[10~15]。その一環として，人々の日常的な諸状況における時間観について言及してきた[12,13]。時間観とは，時間に対する価値的見方や態度であり，それについての研究は時間に対する心理的属性の探求と位置づけてよいであろう。これまで，時間経験の基本属性としては，例えばニュートン（Newton, I.）の過去・現在・未来やライプニッツ（Leibniz, G.W.）らの前・後などがよく知られている[2]。しかし，ここでいう時間観とは長さや速さ，あるいは快適さ・充実性・無常感など人々の日常的経験内容の情緒的な時間表現に基づく時間意識である。また，本研究では「時間」の意味を「時間」という語に付随して連想される情緒や気分といったいわばイメージ（個人の思想・信念・期待・態度・情緒・願望などが入り混じった印象）として捉える。前論文[12]では，SD法[6,7]（Semantic Differential Method）を用いて大学生男女の「時間」イメージについて論述したが，本論文では，「時間」イメージの形成要因を探る目的で性格傾向の違いによる時間イメージの差異について調べてみる。

II. 方　　法

①評定項目の選定，②調査対象者（男女大学生［有効資料672人］，年令18～25才［平均22.5歳］：男子437人，女子235人），③調査方法などについては先の論文[12]に記した通りである。また，時間イメージ調査とともに，矢田部一ギルフォード（Y-G）性格検査を併せて実施した。これにより，調査対象者を性格傾向別に分類し，その分類による評定傾向の差異について検討する。④データ処理は，「時間」概念についてそれぞれ42形容語対に対して7段階で評定された各評定段階に便宜的に1～7の得点（SD 評点）を与えた。それに基づき各形容語対別平均SD評点，標準偏差（sd），評点別頻度（%）などを算出する。また，因子分析は評定項目間の内部相関行列を求め，それを基に主因子解によって最小の直交次元を定め，さらに varimax rotation を行い最終因子解とする。これら統計的解析には名古屋大学大型計算機センターのSPSS 統計パッケージ，および統計プログラム "HALBAU"（現代数学社刊：「多変量解析ハンドブック（柳井・高木編著[22]）」を利用した。

III. 結 果 と 考 察

全調査対象者についての「時間」の全体的イメージ・プロフィール，および男女別プロフィールの差異については既に先の論文[12]にまとめている。「時間」概念のイメージ結果の大要を記せば次の如くであった。①「時間」のイメージとしては男女とも共通して，〈大切で・気になる〉もの，〈速く・少なく・密な〉もの，〈忙しく・厳しい〉ものという評定傾向が認められた。日常的生活感情の中で，時間の稀少性にかかわる意識といってよく，行動制約要因としての「時間」イメージがよく表れていた。②評定の全体的な傾向には男女間ではほとんど差異はみられなかった。むしろ非常によく類似していたといってよい。ただ，女子の評定の程度は男子のそれを凌駕しており，女子の感受性の鋭敏さが示唆された。

本論文では，これらの「時間」イメージと性格傾向との関係を吟味することが主目的であり，Y-G性格検査による性格傾向によるイメージ・プロフィールの差異を重点的に吟味する。なお，その検討に先立って42形容語対の因子的分類を再度試み，分類された「時間」イメージの規定要因別に性格傾向による違いを検討する。

1. 因子分析結果

先の論文[12]では回転前の各因子の固有値1.00を基準に因子数を決めて7因子が抽出された。そして，varimax rotation 後の因子負荷量｜.400｜以上の形容語対を基準に因子の解釈と naming を試みたが，この基準設定では，結果的に第6，7因子ほどになると含まれる形容語対の数が僅かであった。本研究の目的，すなわち，用いた全ての形容語対による「時間」イメージを，Y-G性格検査による性格型の違いにより検討することからすると，「時間」イメージ規定因子数を減らして，個々の因子に含まれる形容語対を増すことで形容語対の分類を図った方がより生産的のように思われる。そこで，7因子抽出の場合の比較的小さな因子負荷量二乗和（寄与率）を示した第6，7因子を削除して，改めて抽出因子数を5因子と定めて計算をし直し，用いた全ての形容語対を因子負荷量の大きさにより，いずれかの因子に分類し，この結果に基づいて因子別に性格型別の「時間」イメージ・プロフィールを検討してみることにした。Table 1 は各因子に含まれる形容語対を因子負荷量絶対値の大きさの順に並べ換えて示した因子分析結果である。

第1因子から5因子までそれぞれに含まれる形容語対の関係を基に，「気分因子」「時間的展望因子」「活動性因子」「時間的構造因子」「確実性因子」と名付けた。本論文では用いた形容語対の分類を目的とする因子分析であるために，すべての形容語対を因子負荷量の大きさによっていずれかの因子項目に分類した（Table 1 参照）。以下，性格型別の時間イメージについては，ここで抽出された5因子別に検討する。

Table 1 Rotated Factor Matrix

形容語対 ＼ 因子	I	II	III	IV	V	h^2
暖かい—冷たい	−.629	.091	.086	.081	.077	.424
快い—不快な	−.553	.192	.196	−.046	−.024	.383
よい—悪い	−.546	.157	−.022	−.122	−.026	.338
充実した—空虚な	−.530	.045	−.140	−.039	−.208	.347
うれしい—悲しい	−.502	.056	−.027	−.055	−.011	.259
寂しい—にぎやかな	.500	.092	.086	−.051	−.025	.269
明るい—暗い	−.416	.046	.076	−.113	−.050	.196
豊かな—貧弱な	−.422	.358	−.054	−.116	.067	.327
清らかな—濁った	−.375	.159	.049	−.323	−.147	.294
美しい—醜い	−.348	.264	−.028	−.206	.009	.234
動的な—静的な	−.315	−.002	−.320	−.059	.094	.214
固い—柔らかい	.303	−.247	−.088	−.112	−.282	.252
大きい—小さい	−.011	.671	.062	−.033	.084	.463
広い—狭い	−.125	.592	.138	.037	.021	.387
ふくらんだ—縮んだ	−.260	.498	.046	−.105	.013	.329
長い—短い	.006	.449	.386	.111	−.085	.371
永遠の—はかない	−.133	.441	.108	−.061	−.193	.264
のんびりした—いらいらした	−.303	.396	.344	.021	.050	.370
厚い—薄い	−.227	.370	−.193	.031	−.061	.230
強い—弱い	−.047	.364	−.183	−.219	−.125	.232
忙しい—退屈な	−.036	−.137	−.515	−.249	−.156	.372
速い—遅い	.071	−.085	−.495	−.243	.057	.319
きびしい—やさしい	.277	.009	−.427	−.166	−.093	.295
気になる—気にならない	.005	.031	−.426	−.056	−.049	.188
急な—ゆるやかな	.051	−.168	−.409	−.253	.092	.271
大切な—つまらない	−.207	.093	−.400	−.139	.040	.232
重い—軽い	.206	.140	−.361	−.015	−.027	.193
なじみのある—なじみのない	−.220	.066	−.318	−.038	−.248	.216
複雑な—単純な	−.076	.088	−.313	.074	.261	.186
多い—少ない	−.098	.277	.312	.064	−.116	.201
遠い—近い	.173	.210	.270	.052	.110	.162
粗い—密な	−.066	−.164	.183	.169	.154	.117
鋭い—鈍い	.093	.011	−.230	−.569	−.127	.402
新しい—旧い	−.290	.087	−.109	−.459	.088	.321
積極的な—消極的な	−.217	.022	−.292	−.456	−.073	.346
真すぐな—曲った	.117	−.052	−.054	−.430	−.410	.372
若々しい—老けた	−.359	.038	−.138	−.414	.088	.328
高い—低い	−.098	.215	−.124	−.299	.062	.164
湿った—乾いた	−.061	.017	−.047	.282	.060	.090
確実な—不確かな	−.084	−.005	−.109	−.102	−.602	.391
変わらない—変わりやすい	.091	.038	.130	.047	−.522	.301
予測できる—予測できない	−.166	−.113	.018	.023	−.385	.189
因子負荷量２乗和	3.438	2.557	2.523	1.857	1.464	11.839
寄与率（%）	29.04	21.60	21.31	15.69	12.37	
累積寄与率（%）	29.04	42.64	71.95	87.64	100.0	

2．Y-Gテストによる性格判定型別「時間」イメージ

Y-G性格検査は全回答者671人に実施した。Y-G検査の最終判定は，周知のように，情緒的安定性・社会的適応性・向性（積極性）の組み合わせにより型別の判定がなされる。そのようにして分類されたA，B，C，D，E型の性格傾向[1]については Table 2 に示す如くである。

さて本調査対象者に対するY-G検査の最終判定結果の内訳は，A（A′を含む）型；78人，B（B′を含む）型；110人，C（C′を含む）型；50人，D（D′を含む）型；149人，E（E′を含む）型；93人，そして，混合および判定不能；191人であった。Fig. 1はA，B，C，D，Eのそれぞれの性格型別の「時間」イメージ・プロフィールを因子別に示している。また，図中の右端に示した◎は0.1%，○は1％の水準で比較した性格型間の平均評定値の有意差が認められた形容語対である。なお，A型は情緒面・適応面・向性面の全てにおいて平均型であるため，群間の比較対象群からは除くことにした。また，「時間」イメージの全体的プロフィールは先の論文[12]において論述したので，本論文ではY-G性格型別比較について重点的に吟味する。

平均評定値について各性格型別相互の差の検定結果表を見比べてみると，因子別では「気分」因子と「活動性」因子に有意差のある形容語対が多い。また，D-E型間では「確実性」因子を除いて，全ての因子に有意差のある形容語対が認められた。今，少し結果を詳しく検討しておこう。

Table 2 Personality Traits Classified according to the Yatabe-Guiford Personality Inventory[1]

	情緒性	社会適応性	向性	一般的特徴
A典型	平均	平均	平均	目立たない平均的なタイプで主導性は弱い。知能の低い場合は平凡・無気力の人が多い。
B典型	不安定	不適応	外向	不安定積極型。対人関係の面で問題を起しやすい。知能の低い場合は特にその傾向が強い。
C典型	安定	適応	内向	安定消極型。平穏だが受動的であり，リーダーとして他人を引っぱっていく力は弱い。
D典型	安定	適応または平均	外向	安定積極型。対人関係で問題を起すことがなく，行動が積極的だから，仕事の面でもリクリエーションの面でもリーダーに向いた性格である。
E典型	不安定	不適応または平均	内向	不安定消極型。引込み思案で積極性に欠ける「とじこもり型」だが，自分自身の内面は趣味や教養で充実していることが多い。

i）安定性・適応性・向性の3側面とも異なる型間の比較

【D型群—E型群比較】：　D型とは情緒的には安定し・社会的には適応し，そして外向的（積極的）タイプである。一方のE型は情緒的不安定・社会的不適応・内向的（消極的）であり，Y-G検査で判定される性格傾向の全てにおいて両群は対立的である。Fig. 1の有意差検定結果をみると，「確実性」因子を除く他のどの因子においても有意差のある形容語対がいくつか認められる。特に，「気分」因子においてはほとんどの形容語対についてD型—E型間で顕著な差異が認められた。「時間」イメージにおいて，D型群はE型群に比して，"よい・充実した・豊かな・動的な" などの評定面でE型群を凌駕している。時間イメージの中の「気分」的成分は，恐らく，日常生活感情一般を表していると思われるが，「時間」の過ぎ行くこととか，あるいは万象の変化などに対する感情に差異があることを示唆しているものと思われる。「気分」因子以外では，「時間的展望」因子で "ふくらんだ・永遠の" という評定傾向が，また，「活動性」因子では，"なじみのある・遠い" とする評定傾向が，「時間的構造」因子では "若々しい・新しい・積極的な" 評定傾向がD型群がE型群に比して著しいことが認められた。D型群とE型群は情緒的安定性の面でも，社会的適応面でも，また，向性面でも反対傾向にある群である。「時間」イメージ・プロフィールからみると，情緒面の安定—不安定傾向の違いが「時間」イメージの差異としてよく現れたようである。

【B型群—C型群比較】：　B型群は情緒的不安定・社会的不適応・外向的（積極的）とする性格傾向群である。一方，C型群は情緒的安定・社会的適応・内向的（消極的）とする群である。このB—C群比較も傾向において全て対立的である。この比較では，「時間」イメージ評定において，「活動性」因子にのみ評定値の群間の有意差がいくつか認められ，B型群はC型群に比べて，"忙しい・速い・重い" といった形容語においてC型群を凌駕し，文字通り，性格傾向の違いが評定傾向の違いに現れたような結果であった。

ii）安定性・適応性・向性のうち2つが異なり，1つが同じ場合

【B型群—D型群比較】：　B型群は前述の通り，不安定・不適応・外向的（積極的）傾向であり，一方のD型群も前述したように，安定・適応・外向（積極）型である。つまり，向性が同じ積極型で情緒的安定性と社会的適応性が反対傾向にある群比較である。

平均評定値の両群間の有意差検定によれば，上述の「気

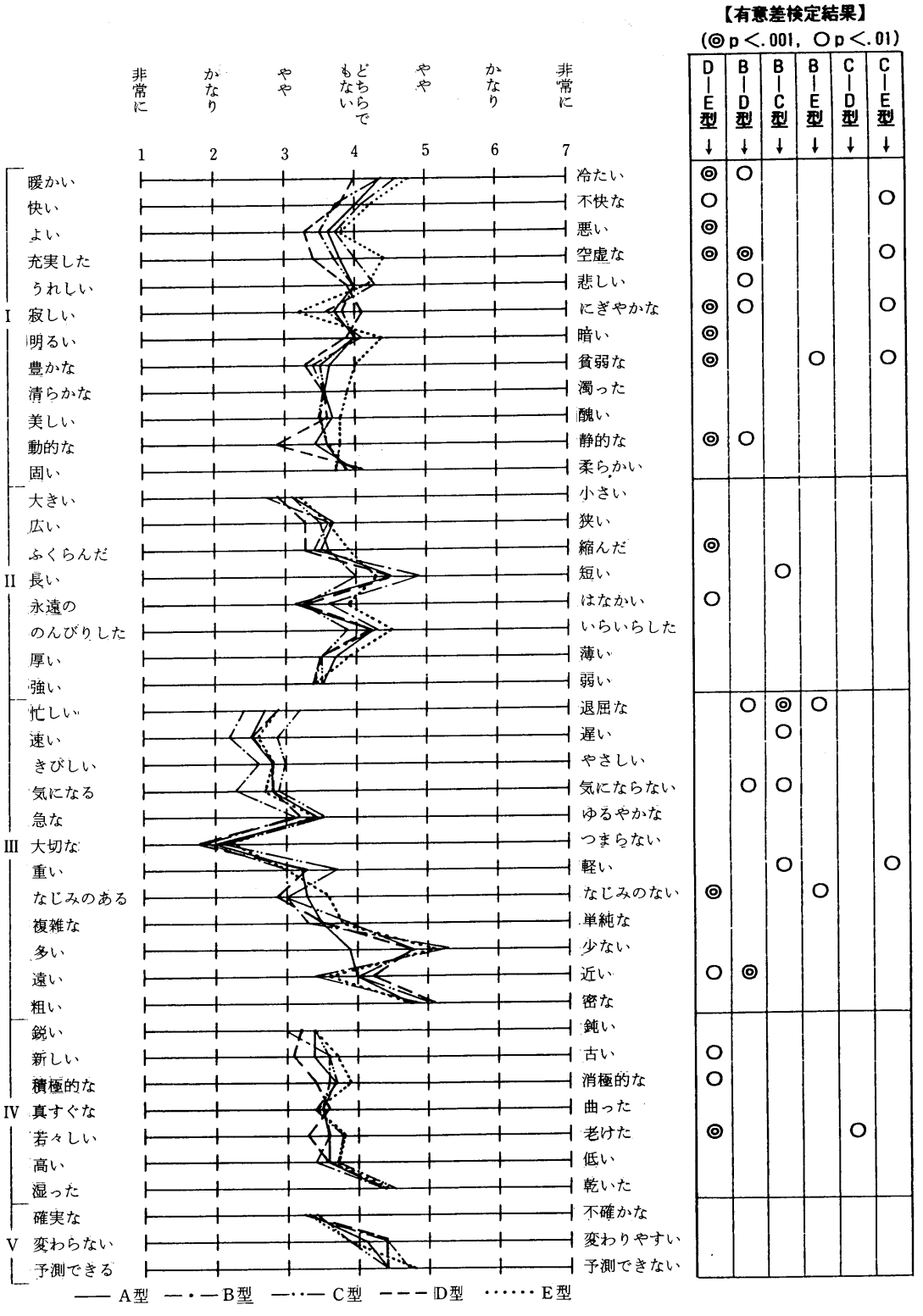

Fig. 1 Image Profiles of "Time" in each of Personality Types.

分」因子と「活動性」因子に有意差の見られる形容語対が多く見受けられる。この結果は，前述のD－E型群比較の結果と同じであり，この限りにおいては情緒面の安定―不安定，適応面の適応―不適応の違いが「時間」イメージの差異をもたらしているようである。

【C型群－E型群比較】： C型は前述の通り，情緒的安定・社会的適応・消極（内向）型であり，一方のE型も前述通り不安定・不適応・消極（内向）型である。つまり，消極的傾向は同じでも，情緒的安定性と社会的適応性が反対傾向にある性格群比較である。

図中の有意差検定表が示すように，「気分因子」において，いくつか評定値の群間の差異を示すものが認められた。"快い・充実した・にぎやかな・豊かな" といった形容語の方向にC型群の評定値はE型群のそれを凌駕していた。この群間の比較をみると，情緒的適応性の違いは「時間」イメージ評定傾向に出てくるように思われるが，社会的適応性の違いは「時間」イメージ評定に差異をもたらさないようである。

iii）安定性・適応性・向性の1つが異なり，2つが同じ場合

【B型群－E型群比較】： 両群は共に情緒的に不安定・社会的に不適応であるが，向性面のみが反対傾向である。「時間」イメージ評定値が両群間で差異が認められたものとしては，「気分因子」で1つ，「活動性因子」で2形容語対であった。

【C型群－D型群比較】： 両群は共に情緒的に安定・社会的に適応であるが，向性面において反対の性格傾向である。両群では「時間的構造因子」の "若々しい・新しい" 傾向にD型群が若干C型群を凌駕しているが，他の因子については差異の顕著な形容語対はほとんど認められなかった。

結果を総括すると，「時間」イメージの差異をもたらす性格傾向では，向性面，すなわち活動の積極―消極性の違いが総じて著しく，「時間」イメージの規定因子中の「気分因子」「活動性因子」に含まれる形容語対のいくつかに傾向差を生じているようであった。また，情緒的安定―不安定の差では，特に「時間」イメージの「気分因子」に含まれる形容語対群に評定の差をもたらす場合のあることが認められた。換言すれば，適応性と「時間」イメージ評定傾向には積極的関連性は認められなかったといってよいであろう。確かに，われわれの日常生活において，「時間」は活動性の面において意識されることが多い。積極的に事をなす人ほど時間の不足を嘆くことになろう。その不足感こそ時間を強く意識させる要因と思われ，"もう" の感情は積極的活動時のものといってよいであろう。また，D－E型比較においてみられた「気分因子」に含まれるいくつかの形容語対の差も，日常生活における生活感情の違いによると思われ，その生活感情は，また，日常的活動に伴う感情と考えられる。これらのことから行動面，ことに積極的か消極的かが「時間」イメージの "もう" と "まだ" を分岐させる要因といってよいであろう。

IV. 討　　論

42反対形容語対から成る SD 法[6,7]（Semantic Differential Method）を用いて「意識時間[5]」の心理的意味を検討した。意味とは「言語中のある表現が果たす機能もしくは表現の表す内容」（平凡社：哲学事典[4]，1968）のことであり，要するに，あるものが単にそのものとしてのみあるだけでなく，何か別のものに値したり，機能したりすることである。本研究では「時間」の経験的な意味[20,21]を情緒的側面について捉え，分類・整理することを目的とすることから，"意味"の用語よりも，ある対象についての態度・期待などの総体的な印象として "イメージ" の用語を用いることとした。

さて，抽象的な概念である「時間」にも人々の様々な経験的意味が付与されているといってよいであろう。長年に亘る生活経験の中で「時間」イメージが出来上がっているとみてよいであろう。このような意味から，「時間」イメージの探求は，人々にとって「時間」とは何か，についての接近であるといってよいであろう。「時間」の生活感情などに伴うイメージとしては，既に述べたように，哲学や文化人類学などの研究において，これまでにも円環的構造，螺旋的構造，有限な直線的構造などが知られている[17,18]。本研究では，心理学のテーマとして情緒的側面を中心とした「時間」イメージの因子的構造を明らかにすることを主眼としている。先の研究[12,13]では男女大学生672人を対象として，42の反対形容語対を用いた SD 法により「時間」イメージの規定因子を探り，7因子を抽出した。また，男女別「時間」イメージ・プロフィールを検討し，「時間」が行動制約的要因としてイメージされている様子を窺うことができた。本研究はこの先の研究[12,13]の一環として実施されたものであり，同一対象者（評定の特定評点への偏向が強い1例を除く671人）に対するY－G性格検査により分類された5つの性格型による「時間」イメージの違いを調べたものである。また，固有値1.00を基準に抽出した7因子では寄与率が10%以下の因子もみられたので，本研究では再度因子分析を試み，「気分」「時間的展望」「活動性」「時間的構造」「確実性」と名付けた5因子を抽出した。そして，用いた42の形容語対の全てを，因子負荷量の大きさにより抽出した何らかの因子に分類し，因子別に性格型の違いによる「時

間」イメージ・プロフィールを検討した。

性格別「時間」イメージ・プロフィールによれば，各因子別に検討しても，全体的プロフィールの類似性は高く，性格型間の違いは個々の形容語対に対する評定の程度的差異が若干認められる程度であった。その中で，特にD型群とE型群には，いくらかの傾向差と，かなりの評定値の差が認められた。それらは「気分」因子のみならず，「時間的展望」「活動性」「時間的構造」の諸因子においても見られた。〈暖かい・快適で・よい・充実した・豊かで・動的〉といった気分，〈広く・ふくらんだ・永遠の〉といった時間的展望，〈忙しい・速い・なじみのある〉という活動的な傾向，〈鋭い・新しい・積極的な・若々しい〉とする傾向などはD型群がE型群の評定を大きく上回っていた。中でも，〈充実した（D型）—空虚な（E型），明るい—暗い，近い—遠い〉などの諸形容語対では評定傾向が反対を示すものも見られた。「時間」のイメージ評定を求めたが，「時間」にかかわる生活経験感情が評定にかなり投影された結果であると思われる。

性格型間の「時間」イメージ評定値についての差の統計的検定によれば，D—E型比較では「気分」「時間的展望」「活動性」「時間的構造」の諸因子においていつかの形容語対に有意な評定値間の差が認められた。またB—D型比較では「気分」「活動性」因子において，B—C型，B—E型では主に「活動性」因子において，さらに，C—E型では「気分」因子において平均SD評定値に有意な統計的差を示す形容語対がいくつか含まれていた。これらのことから，総じて，性格型による「時間」イメージの差異は「気分」「活動性」に関する諸形容語対が多く，「時間」イメージが日常生活における気分的な側面や，活動的側面による影響が強いことが示唆された。このことは先の研究における「時間」が行動制約的要因としてイメージされている傾向と軌を一にするものと思われる。

以上，Y—G性格検査による性格型と「時間」イメージの関係について検討したが，性格の違いによる評定差が認められた因子は，主に「気分」「活動性」であった。D—E型比較（情緒的安定—不安定・社会的適応—不適応・積極—消極という性格の3側面とも反対傾向）は「確実性」のみが差異が認められなかったが，他の性格型別比較において評定値に差が認められる項目が少なかったのは「確実性」「時間的構造」「時間的展望」の諸因子であった。これらの結果を総括すれば，性格型による差が認められた諸因子（「気分」「活動性」）は，いわば〝時間をどう生かすか〟に関するような諸因子であり，一方，差が認められなかった諸因子（「時間的展望」「時間的構造」「確実性」）は〝時間をどう見るか〟に関する因子と総括できるように思われる。性格検査で現れたような現在の心的状況の違いが，今と将来についての生き方の違いとなって「時間」のイメージにそれぞれ異なった投影の仕方をしたのかもしれない。これらの考察内容は，本研究のような観念的・抽象的「時間」イメージではなく，特定の場面設定をしたより具体的状況の下での「時間」イメージ研究へと発展させることにより，いっそう人と「時間」のかかわりが鮮明になるように思われる。

文　献

1）江口恒男，1976，性格診断マニュアル—企業におけるYGテストの応用と実例　テクノ．

2）フレッス，P.（原　吉雄訳）1960，時間の心理学（Fraisse, P. 1957 Psychologie du temps）創元社．

3）Hartocollis, P. 1983 Time and timelessness. — The varieties of temporal experience, a psychoanalytic inquiry — International Universities Press.

4）林　達男・野田又夫・久野　収・山崎正一・串田孫一編，1968，哲学事典，平凡社．

5）伊東俊太郎，1980，存在の時間と意識の時間（東京大学公開講座「時間」，東京大学出版会，所収）．

6）岩下豊彦，1979，オスグッドの意識論とSD法，川島書店．

7）岩下豊彦，1983，SD法によるイメージの測定，川島書店．

8）木村　敏，1980，自己・あいだ・時間—現象学的精神病理学—，弘文堂．

9）木村　敏，1982，時間と自己，中公新書．

10）甲村和三・河野慶三・片山幾代・野尻久雄・宮崎光弘・小笠原昭彦，1980，心理的時間に関する実験的研究(3)— Duchenne 型筋ジストロフィー意者と健常大学生の時間的展望の比較—　名古屋工業大学学報，32，9—16．

11）甲村和三・河野慶三・野尻久雄・宮崎光弘・小笠原昭彦，1981，心理的時間に関する実験的研究(4)— Duchenne 型筋ジストロフィー意者の時間評価—　名古屋工業大学学報，33，1—8．

12）甲村和三，1985，心理的時間に関する実験的研究(7)—時間の意味的構造について—　名古屋工業大学学報，37，7—14．

13）甲村和三，1986「時間」概念の意味的構造，第50回日本心理学会大会発表論文集，p. 310.

14）甲村和三・小笠原昭彦，1987，心理的時間に関する実験的研究(9)—健常学生群と比較した各種疾患者の「時間」イメージ—　名古屋工業大学学報，39，9—16．

15）甲村和三・小笠原昭彦，1988 Duchenne 型筋ジスト

ロフィー患者の「時間」および「将来」に関するイメージの分析，心身医学，28，No. 4, 317—323.

16）水島恵一・上杉　喬編，1982，イメージの基礎心理学（イメージ心理学１）誠心書房.

17）村上陽一郎，1981，時間と人間—序論（村上陽一郎編「時間と人間」東京大学教養講座３，東京大学出版会，所収）

18）中埜　肇，1976，時間と人間，講談社現代新書

19）Sherover, C.M. 1975 The human experience of time. New York Univ. Press.

20）滝浦静雄，1976，時間—その哲学的考察—岩波新書

21）滝浦静雄，1975，時間の言葉，月刊エピステーメー12月号，104—116　朝日出版社

22）柳井晴夫・高木広文編，1986，多変量解析ハンドブック，現代数学社